（社）日本ライフストーリー研究所　　2022/01/15　第 27 号

JLSR ニュースレター

百聞は経験に如かず

――捕鯨者は船乗りである――

赤嶺　淳

「乗ってみねぇど、わがんねぇ」

いったい何度、聞かされてきたことだろう？　だが、ついにその機会がやってきた。

2021 年 6 月、世界で唯一現存する捕鯨母船・日新丸（共同船舶株式会社所有、8,030 トン）に乗船し、2 ヶ月間にわたって三陸沖でニタリクジラを追う機会を得たのだ。

かつての商業捕鯨（～1987）にしろ、調査捕鯨（～2019）にしろ、捕鯨船団の航海記や映像記録は少なくない。だから、母船式捕鯨の実際は想像できなくもない。しかし、船内生活のなんたるかを知るには、同乗してみるしかない。以下、わたしが体験した母船での（食）生活について紹介し、捕鯨者たる以前に「捕鯨者たちが船乗り」であることを説いてみたい。

いざ、乗船するとなると、2 カ月にもおよぶ船内生活を、いかにまわすのかに悩まされることとなった。期間は問題ではない。近年は忙しさにかまけ、2 カ月間も調査にでることは稀なものの、かつては 3、4 カ月間の調査などは日常茶飯だったからである。ただし、所詮は「足りなくなれば、お店で買える」環境下でのことだった。以前、元捕鯨者が「船乗りは、針 1 本でも借りたりしない。自分の物は自分で持って行くものだ。事故はつきものだから、万が一のことを想定し、新品の下着一式も忍ばせていた」と語ってくれたことが、俄然、現実味をもって迫ってきた。

水産庁の監督官として南氷洋に赴いたことのある知人は、「日常生活を過ごせるようにしないとね」という。会社からは、「自分の時間をすごせる物を持ってきてください」とも（事実、船員さんたちはドラマや映画、釣り番組などを録画した DVD を持ちこんでいた）。個室をあてがってくれるというので、本は持込み放題である。ちょうど昭和 9（1934）年に日本捕鯨株式会社が南氷洋に初出漁した時代に関心をもっていた頃だったので、昭和恐慌から満洲関係の本を新書から文庫までひととおり持っていくことにした。研究室の書棚からあれこれ選抜する作業は、実に楽しいものであった。

最大の難問は、コーヒーと酒類であった。大学進学を契機にひとり暮らしをはじめてからというもの、豆を挽き、コーヒーを淹れるのが、朝の儀式となっている。生豆を買ってきて、煎ってみたこともある。豆を持参したいところだが、如何せん、勝手がわからない。滓を処分できるのか？　余計なゴミは慎むに如くはなし。

30 数年ぶりにスーパーでインスタント・コーヒーの棚を覗いてみた。多様なブランドが凌ぎをけずっているではないか！　深煎り系の商品 3 品を試飲してみたところ、悪くない。実験の結果、マグカップ 1 杯に 6、7 グラムの粉が

要ることもわかった。目覚めに 2 杯、仕事おわりに 1 杯として 1 日 20 グラム弱、航海全体で 1 キログラム強もあればよい。135 グラム入りの袋を 8 つ持ちこんだところ、下船時、1 袋がそっくり余ってしまった。

しかし、酒類的には船乗り失格であった。さきの元監督官によれば、「昔はみんなでワイワイやっていたようですけど、最近は、仕事が終われば、みんな部屋でゆっくりしています。お互いに深入りしないことが、長期間の航海を成功させる秘訣なんでしょう」ということだった。その助言にしたがい、部屋呑み用として紙パックの焼酎を芋 2 本、麦 1 本、蕎麦 1 本に、バーボン、スコッチ、ジンを 1 本ずつで十分だと判断した。「おつきあい」用に 350ml の缶ビール 72 本(6 缶パック 12 個)も用意した。

この見積もりが甘かったことは、すぐ露呈することになる。出港後 10 日間がすぎた 6 月 21 日より、マスク・フリーの生活となり、部屋間移動の許可がでた。部屋にお邪魔するのに、缶ビール 1 本を持っていくわけにはいかない。6 缶パックごと持参するのが作法──とくに客員のわたしとしては──なのであった。元監督官が語ったのは士官同士のつきあいなのであって、わたしが求めていたのは部員さんとの交流だったのだ。

窮地に陥ったわたしは、「まかない」と呼ばれる司厨部のみなさんの厚意にすがることになった。司厨部は、2 歳上の上田伊三夫司厨長ひきいる 6 人のチームである。なかには 3 月に水産高校を卒業したばかりの西山翔くんもいる。長男が 20 歳、二男が 17 歳というわたしからすれば、西山くんは息子のような存在だ。高校時代にハワイまでの航海実習を経験しているとはいえ、100 名ちかい乗員のご飯をつくるチームの最年少である。気苦労も多いにちがいない。いろいろと心配になってくる。実際、彼は「ボーイ」と呼ばれる係で、士官食堂での給仕、士官風呂の掃除、士官部屋のベッドメイキングなどがおもな仕事で、庖丁を握らせてもらうのは、まだまだ先のことだ。

司厨部のみなさんと呑むにあたっての懸念は、わが子同然の西山くんにあった。学外のこととはいえ、大学教員たるわたしが、未成年者と飲酒することは御法度だ。しかし、幸か不幸か、西山くんはお酒が呑めないくちであった。「こんなこともあろうか」と用意していたスイーツを西山くんに渡したが最後、気兼ねすることなく司厨部の飲み会に日参できるようになった。

居酒屋「まかない亭」の常連と化したことを正当化するつもりはない。だが、部員食堂に浸っているうちに、部員さんたちの一面を知れる機会でもあることに気づいたのである。日新丸には、船内で生産した製品(鯨肉)をマイナス25度で保管する冷艙がある。わたしたちが消費する10トンもの食材も保管されている。希望すれば夜食用の食材も置くことができる。そんな人のために「まかない亭」の一角には、電子レンジや IH 調理器などが設置されている。長い航海をやりすごす工夫のひとつである。食事は、みんなの心がほぐれるひとときでもある。そんな時の雑談から、素顔も見えてくるというものだ。

チーム上田は、司厨部に配属されて料理を覚えた人が半分、司厨長自身をはじめ、飲食店勤務を経てきた中途採用の人が半分であった。日新丸に食材を納入する船食業者さんによれば、同船の食費は同業者中の平均値であるらしい。材料をやりくりして、食事にメリハリをつけることも司厨部の任務である。冷艙にある食材を確認しながら、献立を考案するのは、司厨長と和洋の経験豊富な加藤厚介さんのふたりが担っていた。昼は丼物か麺がふつうだが、夜はメインが魚だとすれば、サブは肉、それに小鉢と汁の 4 点料理が基本である。海軍よろしく 7 のつく日の昼はカレーだったし、航海の安全と大漁祈願をおこなう 1 日と 15 日の昼食には、お頭つきのマダイの塩焼きがついた(その日、当直以外の士官は朝 6 時にブリッジに集合し、神棚に参拝する)。土用には鰻丼もでたし、七夕は日新丸の伝統とされる 18 貫盛りの豪華な寿司で祝った。都内のスペイン料理店に勤務していた亀田啓司さん──コロナ禍の 2020 年秋に中途入社──は、ソース類一手を担当していた。亀田さんが、ご当地スペシャルということで、愛知県出身者のために工夫した赤味噌をベースにしたソースは、これまで食べたトンカツのなかで、もっとも美味なものであった。

このように船の食事は、想像以上のものであった(おかげで 5 キロも体重が増えてしまったほどだ)。しかし、「下船したら、何を食べたいか」といった会話も頻繁にかわされた。いつの頃からか、わたしはチーズとワインが恋しくなった。そんな話を耳にした加藤さんは、自分用に積んでいたチーズと赤ワインをふるまってくれた。

たった 50 日間のことなのに、底知れない、あの渇望感は何だったのか？　その正体を了得したのは、下船後に『宝島』(1883)の記述を眼にしたときである。

> 人間どこにいても、おれにいわせりゃ、なんとか生きていける。しかし、たまには人間なみの食い物がほしくて、たまらなくなる。……夜長の夢にチーズが出てきたなんて、今日まで何度あったことか。たいていこんがり炙ってあって――はっと気がついたら、なんだ、夢なんだ。*

*スティーヴンスン（村上博基訳）、2008、『宝島』、光文社古典新訳文庫、166 頁。

無人島で 3 年間も「山羊と木の実と牡蠣で命をつないできた」ベンと、船内で十分すぎる食生活を謳歌していたわたしとを同一視することはできまい。しかも、仲間内のイザコザから置き去りにされたベンと異なり、わたしは志願して乗せてもらったのだ。それなのに、わたしは「足るを知る」ことがなかった。この欲望を自制できるようになることが、「船乗りになる」ことなのであろう。

南氷洋での調査捕鯨から撤退して、はやくも 3 年がたつ。2019 年度以降に入社し、南氷洋を知らない日新丸の乗組員は 26 名と、すでに 3 割弱を占めるまでになった。母船式捕鯨とは、「公海たる南氷洋で輸出目的の鯨油を生産」するために 100 年前に考案された操業形態である。ところが、日新丸は「自国の排他的経済水域内で国内市場向けの鯨肉だけを生産」するという、あらたな捕鯨の構築途上にある。2024 年度には新造母船の投入も計画されている。鯨肉生産だけを目的とする母船が建造されるのは捕鯨史上初のことである。新造船で活躍するのは西山くん世代だ。彼らは、どんな捕鯨を展開していくのだろうか。

（あかみね・じゅん　一橋大学）

会員からのお便りコーナー

八ヶ岳南麓の研究所に会員が集い、研究会や講習会では『会員同士の交流の場、いろいろな分野の話が聞けて楽しかった』との声をお寄せいただいていました。しかし、コロナ禍のためオンラインが中心となっています。そこで会員の交流を図るため、ライフストーリー研究に関する話題だけでなく、お仕事や日常生活での変化や発見などを、気軽にエッセイにしていただき、ニュースレターで掲載することといたしました。

今回は 2021 年 12 月に4名の方からエッセイをお寄せいただきましたので、ご紹介いたします。次号以降も、随時、会員からのお便りをお待ちしています。

Give me a smile!（笑って見せろよ！）

大川裕司

シドニーは、107 日間におよぶ 2 回目のロックダウンが明け、私が勤務するハイスクール（日本でいう中学・高校の計 6 年間）でも、対面式の授業が再開されています。教師も生徒も常時マスクをしていなければならないという決まりがあるのですが、声が籠ってしまい、特に英語を第二外国語として使っている私にとっては余計に話しづらく（生徒にとっては聞きづらく）、マスクはかなり厄介な代物です。知らず知らずのうちに声のボリュームが大きくなってしまっているのか、「風邪のせいで喉が痛くてマスク」ではなく、「マスクのせいで喉が痛い」というなんだか逆ベクトルの状況になっています。そんなマスクに関するお話です。

2020 年の 7 月、1 回目のロックダウンが始まる少し前のこと。バス停でバスを待っていると、笑みをうかべながら不自然にこちらに向かってくる男性。あれ？　酔っ払い？これはまたちょっと絡まれそうかも…と身構えていると（シドニーではそういうことがたまにあるので）、私の方に顔を寄せてきて一言。

「Give me a smile!」

ギブミーア…なんて？　えっ？笑ってみせろよって…どういうこと？…ああ、そうか…。今日はマスクしていたんだっけ…（溜息）

要は「マスクを外せよ！」ということ。今となっては、マスクの使用が一般化され、屋内にいる時やバス・電車などの交通機関を利用する際にはその着用が義務づけられていますが、コロナ前のオーストラリアには、「アジア系」と呼ばれている一部の人たちを除いて、日常的にマスクをするという習慣がなかったのです。もちろん、「オーストラリア人」といっても様々な文化的バッ

クグランドをもっている人がいるので一括りにすることはできませんが、病院にいるわけでもなく、道で「普通に」マスクをつけているという姿は、多くの人たちにとって「奇妙」で、多少面白おかしく見えていたのかと思います（以前オーストラリア人の知り合いから「なんでアジア系って飛行機に乗っている時にマスクをしているの？」と「半笑い」で質問されたことも）。また、当時はマスク着用の義務化が議論されていた時期でもありました。そのため、「真面目に」「自主的に」マスクをするという行為は、マスク反対派とっては苛立たしく、ちょっとからかってやりたくなるような光景であったのではないかと思います。私に発せられた「Give me a smile!」は、当時のマスク着用に対するある種の「思い」を巧みに表した（捉えようによっては洒落っ気のある？）政治的な「皮肉」であったと思います（当時の私は「あれはレイシズムだ！」と方々で唸っていたと思うのですが）

上記の通り、私はシドニーにあるハイスクールに勤めています。日本にいる生徒に比べて、授業中もよく「しゃべる」オーストラリアの生徒たちには、マスクはかなり不快なようで、顎やおでこにつけていたり、片耳からぶらりと下げていたりと独自の解釈でマスクを「つけている」ことが多く、「Wear your mask PROPERLY!!（ちゃんとマスクをしなさい！）」と「正す」のが私たち教師の日課です。ですが、マスクをちゃんと着けさせても、子どもたちは、眉をあげたり、目配せをしたり、目をきらきらさせて「笑顔」を見せ、ようやくもどってきた対面式での学校生活を楽しんでいます。そんな彼らを見ていると、マスクをしたままでも「Give me a smile 男」の要望に十分に応えることができるんだなと今になって思うのです。

（UNSW Sydney）

思い出のコーヒー

打保　由佳

コーヒーの粉はティースプーンの先にほんの少し、砂糖は袋の半分くらいをカップに入れる。

これは、私が障害者の運動団体で介助者として活動していたころに出会ったSさんに言われたコーヒーのつくり方だ。この方との出会いは、私がライフヒストリーに関心を持つきっかけとなっている。Sさんは、脳梗塞による後遺症で左半身にマヒがあり、全盲の旦那さんと二人で暮らしていた。Sさん夫婦のところにはじめて訪問した時、部屋の中は薄暗くひんやりとしていて、二人は何もしないでぼんやりと椅子に座っていた。帰りの車の中で、一緒に行った主任介助者が「あの人たち自殺するんじゃないか」と言い、二人はそんな雰囲気の中で生きていた。「買い物にいったいどれだけ時間がかかってるんだ！」「ご飯も満足に温められないのか！」。二人はいつも不快そうな表情をしており、何かにつけて怒っていた。刺身にかける醤油の量や電子レンジで温める時間など、私には自分たちへの介助方法だけが向けられた。それでも、私はSさんに話しかけて反応を促そうと試みるが、一方通行で終わっていった。

ある日のコーヒーの時間、旦那さんの冗談にSさんがぷっと吹き出した。一瞬のことだったが、はじめて見た笑顔だった。私は、事業所に戻ると「Sさんが笑ったんです」と言ってまわるほど嬉しい気持ちでいっぱいになった。それから、Sさんのことをよく見てみた。私が床に座っていると「椅子に座りなさい」と声をかけてくれたり、たばこの煙が私の方にいかないように払ってくれたり、いろいろなやりとりがあることに気がつく。次第に、私は、重苦しい沈黙を和らげようと前もって話題を用意し挑んでいたコーヒーの時間も自然と言葉が出てくるようになり、わざわざ話さなくても、ただ一緒にいるだけでよいと思うようになった。

「私たちはコーヒーが好きで、昔暮していた街で豆から挽くコーヒーを飲みに喫茶店によく行っていたんだよ。」

Sさんからコーヒーにまつわる思い出を聞く。この話によって、以前のようにコーヒーのつくり方のみを気にしていた介助ではなく、二人にとっての大切な思い出を加えてつくる介助へと変わった。介助とは、生活上の行為であるため、今の生活に由来している今までの思い出が含まれ、その方法には、個人のライフヒストリーが語られている。そして、介助者は、人生の一部分、一場面にかかわることで、介助を通して、その人のライフヒストリーを受け取り返していく存在になるのだと思う。

（中部学院大学）

コロナワクチン接種にふりまわされる日々

江口千代

私の専攻は看護学です。昨年からの新型コロナ感染拡大で皆さんの日常は、大きく変化したことと思いま

すが、私たち看護系で国家資格をもっている大学教員の日常も、大きく変化しました。
2020 年度からコロナ感染に対応する医療系職員の不足で、その支援を大学教員にまで求める通達があり、教員によっては、大学の責務を一時離れ、コロナ感染者の対応に出向いた人もいます。特に 2021 年にはじまったワクチン接種は、ワクチン接種の打ち手不足ということもあり、国家資格を持っている看護学教員はワクチン接種の打ち手として大学の学生や地域の人々への接種に格闘いたしました。私もその一人となりました。

「昔取った杵柄」とはよく言ったものですが、その言葉とは裏腹に数十年ぶりの注射の打ち手です。厚生労働省の研究班がだした新型コロナワクチンを安全に接種するためのポイントによれば、「注射部位は三角筋中央部で、 肩峰から真下に3横指程度下の位置が目安になること、接種部位が上方すぎるとワクチン関連肩関節障害を、下方すぎると橈骨神経障害を起こすリスク があるので注意が必要、また接種部位の目安として肩峰下の前後腋窩線を結ぶ線の高さを推奨する報告もある」と記載されています。しかし、推奨が次から次に〇〇大学方式などと舞い込み、どれが本当に正しい接種方法なのか変化する情報にふりまわされていました。また、何百人単位の接種の場で、若い人たちなどは、迷走神経反射といって注射の痛みに反応してその場にバタンと音を立てて倒れる人もおり、ワクチンのアナフィラキシーショックなのか、注射の痛みによる迷走神経反射なのか、ドキドキしたことも事実です。そして、政府の声明による 3 回目のワクチン接種の決定で、これからどうなることか、情報が日々変化することで私たち医療系の大学教員も振り回されています。　（広島国際大学）

コロナ禍の生活の中で感じたこと

三浦優子

2021 年も残すところあと数日となった。私たちの生活はいまもコロナ禍の中にあり、この 2 年間、私たちは、新しい生活様式を余儀なくされてきた。私自身の生活にも様々な変化が生じたが、その中でも大きな出来事、そしてそこから感じたことを 2 つほどつづってみたい。
まずは、勤め先の大学での対面授業がオンライン授業に変わったことである。昨年度は 1 年間全く大学に足を運ぶことがなかった。アナログ人間の私にとり、オンラインでの授業といわれてもピンとこず、かなり不安を感じた。年度初めには、早速、大学からオンライン授業の準備として、マニュアルが送られてきたり、Zoom 講習会があったりしたが、授業前にはうまくいくか心配になり眠れない夜もあった。そうこうするうちに少しずつ新しい授業スタイルにも慣れていき、むしろ大学に行く時間も省け、ラッシュに巻き込まれることもなく、意外にオンライン形式が気に入るという段階にまでいった。ところが、今年度になり今度は対面とオンライン双方に対応するハイブリッド授業の形をとることになり、またまたそのやり方に慣れるまでが大変だった。授業前にパソコンに何本ものケーブルをつなぎ、web やカメラのアングル操作などいやはや大変な思いで授業に望んだ。実際に慣れるまでは、オンライン参加の学生の声が聞こえなかったり、こちらの声が聞こえなかったり、いろいろなハプニングがあった。しかし、そうこうするうちに今は、ハイブリッド授業にも少しづつ慣れ授業を進めることができるようになった。ここから学んだ教訓はまさに「習うより慣れよ」。そして時代の変化に合わせて自分を柔軟に変えていくことの大切さ、さらにそこから一歩進めて、それを大変だと思う気持ちから、楽しむという発想の転換の必要性である。実際に、どうなるのか不安な気持ちで始まったオンライン授業だが、そのノウハウに慣れたおかげで今はオンラインや Zoom に親しみを感じ、世界で開催される様々なテーマの講演会に Zoom 参加したり、海外にいる友だちとも Zoom でつながっている。コロナという禍が大きく世界を広げてくれた。

そして二つ目の大きな出来事は、今年の 3 月にドイツから日本帰国時に日本政府の水際対策として 3 日間宿泊施設に待機させられたことである。宿泊施設は小さな窓はあるものの全く開かず、スーツケースを広げることもできないくらいの狭い部屋であった。一歩も部屋から出ることは許されず、食事は毎回ドアノブにかけられ、外の世界とは全く遮断された空間で 3 日間過ごした。毎日窓から、お日様の下で通りを気持ちよさそうに歩く人たちや近くにある学校のグラウンドでのびのびと運動をする生徒たちを眺めては、「私も早く外に出たい」とため息をついていた。「こんな経験は一生することがないだろう、貴重な経験なんだ」と自分に言い聞かせて何とかしのいだ 3 日間。こんなに 3 日間

が長いと感じたことは今までになかった。幸いにも 3 日目の検査も陰性でやっと部屋から解放されたが、もう 2 度と味わいたくない。そして、外に出たときのなんという解放感、監視されず、自分で自由に行動できることの喜び、風を頬に感じることの喜び、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいになった。今まで当たり前と思っていた日常生活がこんなに素晴らしいものと感じたことはなかった。

コロナ禍の中で私たちの生活は大きな制約を受け、大変な思いをすることもある。でもそこには今まで知らなかった発見や気付きがある。先が見えない今だからこそ、コロナ禍での生活が新しい自分との出会いの場となり、さらには新たな未知の世界へとひろがっていけばいいなと思う今日この頃である。　　　（杏林大学）

第 12 回ライフストーリー調査研究講習会の報告

2021 年 11 月 21 日に第 12 回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。参加者は、オンライン（ZOOM）が 21 名、リアル参加者が4名でした。

当日のプログラムは、「ライフストーリー・インタビューのプロセスとTSの読解」でした。

以下に、参加者の感想（抜粋）を掲載します。

・「オンライン参加」が可能になり、参加のハードルが低くなった。本来ならば研究所にうかがいたいところだが、現在の私はオンラインだから参加できたので、ありがたかった。おそらく遠方の方もそうだろうと思う。

・個別の経験をどういう社会的コンテクストで理解するのかということ、人間関係とのからみ、文化的コンテクスト、語り手との相互作用のコンテクストから読み解くということ、学ばせていただきました。

・ブレークアウトルームを使ってのグループでの討論は学びが深まったと思う。（全体よりも）気軽に発言しあえる場なので、ぜひ今後も続けてほしいです。

・特に LH と LS の違いや関係性、協力者と調査者との関係性とインタビューにおけるそれぞれの自己の構築について、理解が深まりました。講義や他の参加者の方々との議論、質疑を通して、調査者として協力者の方々とどのように接していくか、インタビュートランスクリプトとどのように向き合うか、改めて考える機会となりました。

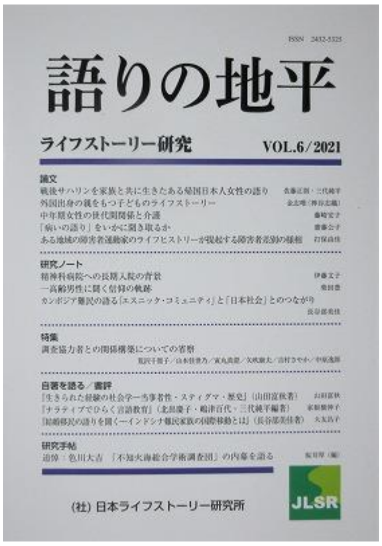
・他グループの報告を聞いて、印象や解釈の多様さに驚きました。自分の受け取り方が当然だと、無意識のうちに考えていたことに気付かされ、解釈の妥当性について意見を聞くことが不可欠であると、再認識しました。

・相互作用的コンテクスト、文化的コンテクスト、歴史的コンテクスト、社会的コンテクスト等紹介していただいたが、ある語りがどのようなコンテクストで発せられたのかを、自分だったらうまく読み解けるだろうかと思った。そこを読み解くコツなどをつかめるように理解を深めたい。

『語りの地平』第 6 号発刊！

『語りの地平――ライフストーリー研究』第 6 号が発刊されました！！！

2月に合評会をオンラインで開催する予定です。詳細がきまりましたら、メールでお知らせをいたしますので、ぜひご参加ください。



創刊号から第 5 号までのバックナンバーを販売しています。詳しくはホームページに掲載しております。図書館や友人・知人に購入をお勧めいただければ幸いです。

第 13 回
ライフストーリー
調査研究講習会
参加者募集!!

テーマ：ライフストーリーの分析、解釈に向けて

☆開催日時：
2022 年 3 月 27 日（日）
10:30～16:40

☆定員：
オンライン参加　約 20 名
リアル参加　若干名

☆申込み：
・2 月中旬頃にメーリングリストでお知らせしますので、ホームページから申し込んでください。参加の受付完了メールをお送りします。定員に満たない場合、追加募集をします。

☆受講料：
会員：3,500 円　非会員：5, 000 円

☆お問い合わせ
info@lifestory.or.jp へお願いします。

講習会プログラム（予定）

＊開講日前にメール添付で、課題もしくは参考資料を配付します。

Ⅰ（10:30～12:10）
参加者の関心を確認し、分析・解釈に向けた基本的考え方を学ぶ。いくつかの方法論の前提となる考え方の紹介。

～昼食（12:10～13:00）～

Ⅱ（13:00～14:40）
資料の討議を踏まえ、TS から解釈へ至る手法を学ぶ。概念やテーマのまとめ方やコンテクストの抽出の手法とともに分析/解釈の着眼点を鍛える。

Ⅲ（15:00～16:40）
自己と社会、文化との関係をひもとく概念枠組みの検討。リアリティ探求の一元化／多元化。論文のまとめ方の注意など。

LS 研　1 月例会のお知らせ

日時：2022 年 1 月 23 日（日）13:00～16:30
場所：日本ライフストーリー研究所リアル参加（5 名ぐらい）およびオンライン参加
報告者：早藤夕子さん（社会福祉法人 林檎の里）
報告タイトル：精神科看護師が優れた実践家に至る過程についての研究
－看護師Fのライフヒストリーから－
概要：精神科病院に従事している熟練看護師たちは、精神衛生法、精神保健法、精神保健福祉法のもとで精神科看護を実践してきた。本研究は精神科熟練看護師のライフヒストリーを聞き取り、精神科看護師が優れた実践家に至る過程に影響のあった特質を明らかにすることを目的とした.今回は看護師Fを取り上げ、彼が実践家として成長できた3つの特質について報告する。
申込：以下の URL よりお申し込みください。
http://lifestory.or.jp/meeting_form/

『語りの地平』第 7 号の投稿をご準備ください!!

・2021 年度会費納入済の会員の方が投稿できます。
・4 月に投稿エントリーを受け付けますので、論文タイトル（仮題でよい）、投稿ジャンル（論文、研究ノート、書評、調査報告など、希望ジャンルの相談も受け付けます）を明記して申し込んでください（エントリー締め切り 4 月末日予定）
・論文、研究ノートについては査読があります。
・投稿規定を「語りの地平」に掲載していますのでご確認ください。

受け入れ論文、図書、報告書

2021年10月1日～12月31日（下線は会員）

論文、報告書、著書などをお送りください

・<u>新井かおり</u>「百五十年、胸中に去来するもの」（石原真衣編, 2021『アイヌからみた北海道一五〇年』北海道大学出版会）.

・石川良子, 2021『「ひきこもり」から考える』筑摩書房.

・<u>小倉泰嗣</u>, 2021「『亡くなる記憶』をサバイブする」（浜日出夫編『サバイバーの社会学』ミネルヴァ書房）.

・<u>矢吹康夫</u>, 2021「見た目問題のモデルストーリーから距離をとる当事者たち」（『ソシオロゴス』no.45）

・共生会 SHOWA 編, 2021『性的マイノリティ/サポートブック』かもがわ出版.

・青山美智子, 2021『赤と青のエスキース』(PHP 研究所.

・『新社会学研究』第6号、新曜社（<u>好井裕明</u>さん寄贈）

新入会員（2021年10月以降、順不同）

森田大輔（東京学芸大学大学院生）

江崎由美子（CHEERS　日本語教師）

ご寄附をいただいた方（順不同）

高田賀子・鈴木明子・伊賀聡子・道前美佐緒・杉座秀親　　　　ありがとうございました。

事務局から すずろごと

明けましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

・新連載の「会員のお便りコーナー」を始めました。投稿していただいた方々のエッセイはどれも大変おもしろく拝読いたしました。ありがとうございます！今後も会員のみなさまからの、何気ない日常の出来事や思いなどのエッセイを募集していきますので、ぜひお寄せください。運営委員一同、お待ちしております。（OA）

・晴れた冬の日暮れ時の散歩はちょっといい感じである。冬至の頃の日没は午後4時半前にやってくるが、年が明けて10日も経てば5時近くなり、さらに少しずつ長くなるからだ。それにつれて子どもたちの遊びではじける歓声、修行をしているように走る若い人たち、高齢者の犬を連れた散歩、女性ラグビーチームの鋭い掛け声など、それぞれの活動の時間がのびていく。この季節になると、スポーツは私たちの健康を確かめているかのようだ。(SH)

・かつて世界をリードしてきたイギリスは、どこも見習う国はないので現実にぶつかって、その都度、対処の仕方を模索してきた。現実的、経験的に。「方針なんてころころ変わっていいんだ」みたいな感じ。コロナ対策でもジョンソン首相がいうと、国民は苦笑しながらも「仕方ないなぁ」と受け止める。日本でそれをやると一貫性がないとか「後手後手」の対策と言われる。岸田首相がいうと「朝令暮改」と揶揄される。何が違うのだろう。(KM)

・引っ越しで越県してからはや数年。コロナが束の間落ち着いた折に、久しぶりに会った知人からお土産に貰ったのは、行きつけだったカレー屋が販売を始めたというレトルト。米との相性が抜群のエスニックカレーの味と辛さは、まさにお店の味そのもの！さぁ、急いで周りのカレー好きに布教しなくては。(TT)

・本ニュースレターの発刊直前に訃報が届いた。森岡清美先生が1月9日未明に亡くなられたという。私には、大学院時代の恩師であり、晩年の20年間に編集本に寄稿してもらっただけでなく、本研究所の活動にも理解を示され会員にもなってくださった。『語りの地平』2号には寄稿を、ニュースレター8号にも論考を寄せてくれた。『ある社会学者の自己形成』(ミネルヴァ書房、2012)には、家族から研究におよぶ人生が包み隠さず記されており、我が身を振り返るとただ圧倒されるばかりである。慎んでご冥福をお祈りいたします。(SA)

（社）日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ケ森 1176-489

E-mail: info@lifestory.or.jp　HP: http://lifestory.or.jp